（B5判二二〇頁　昭和四五年七月刊行　務取扱　広島大学附属図書館）

（朝尾直弘）

藤井　駿著
吉備地方史の研究

いにしえの吉備地方、すなわち今の岡山県全域と広島県東部旧備後国にかけての一帯は、その位置あたかも畿内と北九州との中間にあり、前に瀬戸内をひかえて、とくに交通にもめぐまれていただけに、古来右の二地域についでもっとも早く開け、爾来山陽道の中心として、北方山陰の出雲地方とともに、わが国史の上に独自の地歩を占めてきた。この地方の歴史の研究には、古く永山卯三郎のごとき好学の士があって「吉備郡史」をはじめ、岡山県金石誌等の好著を遺されているが、今回そのあとを承けて、さらに精緻な考証と幅広い視野の下に立った新しい研究が、岡山大学の藤井駿教授によってものにされた。

教授はこの地方の祖神大吉備津彦をまつる備中一宮吉備津神社（旧官幣中社）・旧社家の出身として、六高、京大に学び、昭和五年卒業とともに郷里に帰って母校の教授となり、その後身現岡山大学にあっても引きつづき教授として、通算実に四十年の長きにわたり終始一貫、地方史の研究に没頭せられてきた。その学風は極めて着実で、文献の中に確証を求めて史実を直叙し疑わしきはこれを欠くという史学の正道を行くもの、その対象とするところは古代中世にわたる社寺、諸豪族ならびにその荘園を主とし、かたわら中世の宗教、芸能ならびに近世学者文人等の伝記に及んでいる。教授はそのために県下を隅なく歩き、その社寺旧家を余すところなく訪ねて、新史料の発見につとめられ、今日までに岡山県古文書集三巻を水野恭一郎氏とともに編纂、区別せられているばかりでなく、別に有名な東寺領「備中国新見荘史料」をも編集して学界のために大いに貢献せられたことであった。

この度の新著はそれら博捜せられた史料をもとに、その得意とせられる領域に関し、折にふれて、考証を重ねられてきた大作の論文都合四十九篇をば、補訂の上、主題別に編次せられたもの、明年停年退官を予定せられている教授のためには、まこと好箇の記念となるべきものであろう。今その中からとくに目ぼしい諸篇の若干を拾うてその内容を紹介しよう。

本実は全巻を吉備史と吉備津神社、荘園と中世豪族、中世の宗教と芸能、近世の人物像と歴史の四部に類別、編次せられているが、まずその第一部にあっては崇神朝に四道将軍の一人として吉備国に派遣せられた大吉備津彦命の後裔と伝える吉備氏一族のうち、加夜国造家、すなわち後の賀陽氏をもってその本宗と考え、その系譜を考証しつつ一門消長の跡を考察せられた「加夜国造の系譜と賀陽氏」がもっとも力篇と認められる。教授は吉備氏をもってこの地方土着の豪族であろうとする一部の人々の説を排して、これを皇別（孝霊天皇の皇子）大吉備津彦の後裔とする所伝をすなおに受けいれ、国造本紀や新撰姓氏録によれば、駿河・越前・豊後・肥後等にもその子孫がいる中で、とくに吉備地方に勢力を有した上道・三野・下道（以上備前）加夜・笠（以上備中）

の五国造家をとりあげ、個別的にその消長を考察した上、とくに加夜国造家の後裔が、奈良朝以来中央においてもまた地方にあっても政治的・文化的に大いに活躍し、また吉備津神社の神官として中世を通じて、その祖神を奉斎した事跡を究明される。上古における系譜的所伝についてはもとより確証をあげることが困難であり一般に疑古派の多い今日の学界では教授のように所伝のまま皇別の地方繁衍を説くことはおそらくなお多くの批判が予想されるであろうが、教授が上古の吉備地方には他と少しく異った県の制度があり、吉備氏がその下に授内・弓削部・家人部等を保有しつつ、一個の小独立国的存在として吉備地方に君臨していたと説かれているところは興味深く、その子孫が連綿戦国末期に至るまで、あたかも出雲・紀伊両国造家の如く、社会的に尊貴の地位を保ちつづけた事実は更に興味をひかれるところである。その精神的根拠となるものが、他ならぬ吉備津神社であることはいうまでもないが、歴史を通じてこの社に寄せられた国中の信仰がいかに篤かったかが有名な釜鳴神事やそれとつながりある鋳物師の座や、さてはその門前町の遊里としての繁栄など、トピックスは多岐にわたるが、爾余の諸篇において説かれている。

第二部はこの地方の荘園の個別的な考証とそこに発生した武士豪族の活躍についての叙述からなっている。その中で国史一般との関連からも注意せられるのは、まず「児島高徳の一党たる今木・大島両氏について」の究明である。周知のように児島高徳はかつては一度、太平記作者のえがいた仮空の人物として史上から抹殺されようとした人物であったが、教授は太平記にもその一党として見える今木・大島両氏の根拠地であった備前国豊原荘に関する諸史料が東大寺文書中に遺存することに注意し、それらに見える地名の考証から、高徳の一党がいずれも現存する地名を名字（家名）とし、その名乗の一字共通からたがいの間の系譜的関係とも推定することによって、高徳もまたかれらと同族的関係を有した実在の人物であったことを間接に証明され、改めて太平記の価値を再確認せしめられた。また「北条早雲と備中国荏原荘」の一篇は戦国の雄小田原北条氏の故祖早雲の出自に関する考証で、従来大和・山城（京都）・伊勢等諸説あったその生国に関し最終的に備中説の正しいことを、確実な証拠をあげて示されたものである。その証というのは一は蔭涼軒目録中に見える備中伊勢氏の記事であり、二はこれを裏書する荏原荘法泉寺文書であり、三は諸伝記にみえる吉備津宮に因む挿話であるが、従来田中義成博士による伊勢関氏の一族説が有力であっただけに、藤井教授のこの論文はひろく学界に影響するところ大きいと思う。

第三部にあっては俊乗房重源の備前における活動とその遺蹟の研究が興味がある。重源が東大寺大仏殿復興のために備前国を賜わったことは、愚管抄以下の史料に明証のあるところであるが、その国行為において東大寺瓦を焼いた遺蹟をはじめ、備前吉備津宮に常行堂を建て、またその国府に大湯屋を設けて諸人を入らしめ、豊原荘豊光寺においても同様湯屋を建てたことさらに船坂峠を改修して往来の難を除いたことな

ど「南無阿弥陀仏作善集」に見えるかれの救済事業が一々その現地の実査を経て実証されていることは、備中におけるかれの遺跡なるものがかれに先立って成尋阿闍梨の渡宋前に一時滞留したところでもあったことを明らかにされていることとともに、読むものに一種の感銘を呼びおこすものがある。重源については一遍上人のこの地方における布教事蹟が主としてその縁起絵巻ならびに年譜に即して述べられる。ただそれら重源や一遍による念仏遺蹟が中世末日蓮宗の普及によって、漸次その宗に転向せしめられたという、その顚末やそれに伴なう諸問題、少しおくれて不受不施派の運動などについての論考が一篇も見出せないことは、備中の出身でわが国臨済禅の開祖となった栄西の事蹟についての記述が同じく一篇もないこととともに、この部の標題（中世の宗教と芸能）から期待されるところをなお十分に満たしていない憾みが感ぜられる。

最後に「近世の人間像と歴史」としてまとめられたのは「宇喜多秀家の人間像」以下、石見銀山の山師安原国繁をはじめ、地理学者古川古松軒・国学者藤井高尚・尊攘の志士藤井高雅・萩原広道らの伝記的研究である。そのうち藤井高尚・高雅の両人については、教授は早く別々にその詳伝を著わして吉備津神社より刊行されているので、本書に収められていたものは、たまたまそれに漏れた逸事をめぐる小篇に過ぎないが、高雅（大藤幽叟）とその叔父・緒方洪庵、ならびに萩原広道と藤井高雅の二篇は、幕末風雲急なる時において草莽の国学者と著名な蘭学者との間にかわされた憂国の思、心を打つものがあり、ついに書斎に留まりえずして実践運動に飛込んで行った悲劇の主の一面がよく描かれている。

以上本書の内容の極一部を紹介したに過ぎないが、冒頭にも述べたようにわが国における、もっとも古い政治文化圏の一つとしての吉備地方が、歴史を通じて進み来った足跡のうち、主要なものはほとんど本書の中に尽くされており、本来はそれぞれ独立に執筆された論文の集録であるにかかわらず、そこにほぼ一貫した地方史の像が描き出されてあることが、何より本書の功とすべきところであろう。強いて望蜀の念を付加すれば、近世藩政時代についての論考の甚だ少ないことであって、その方面は教授の関心のおのずから外にあったかとも察せられるが、かつて「池田光政日記」を解読刊行せられた教授のことでもあり、岡山藩の尨大な文書記録をその図書館に引きついでいられる大学のことでもあって、今後必ずやその方面の論考が書きつづけられて、第二、第三の吉備地方史の公刊されるに至るべきを期して待ちたい。切に教授の加餐を祈る。

（A5判　本文五九一ページ　口絵六ページ、京都法藏館発行、定価六、二〇〇円）

（柴田　実）

フィッシャー著
浅田　実訳

一六・七世紀の英国経済

E・J・フィッシャーは、ロンドン大学においてかのR・H・トーニーの学燈をうけついだ、一六・七世紀イギリス経済史研究の最重鎮である。彼の研究は、その一編